

「巻頭特集」住民総出で作る縁起物「吉兆」

蛭子神社の八日戎

地元では「えべっさん」の名で親しまれている、蛭子神社の祭礼「八日戎」。かつては旧暦の二月八日に行われていたが、現在は新暦に改めて、二月八日に開かれている。前日の宵宮と八日の本祭の二日間、授与される「吉兆」を求め、毎年多くの参拝者が詰めかける。

出雲の美保神社より 八重事代主命を勧請

名張市鍛冶町に鎮座する蛭子神社。明治政府の地誌編纂事業における「伊賀国誌草稿」では「名張郡名張字柳原に在り。境内十坪、社殿敗壞、今わずかに不華表を存するのみ。村民等ら造営を計画す」と記されており、明治初頭、神社は荒廃していたと伝える。地元有志によって再建されたのは、明治八年だった。

主祭神の八重事代主命は、美保神社より勧請したという。



蛭子神社責任総代の山村紀生さん(左)と鍛冶町区長の中川進さん

社より勧請したという。八重事代主命は大国主神の御子神で、大の釣り好きだったことから、鯛を手にする福徳門満の神「恵比寿」の姿と重なり、同一視された。鎌倉時代には恵比寿を市場の守護神として祀る風習が起り、やがて商人の間に信仰が広がっていき、商売繁盛の福神となる。

八日戎は商売繁盛を祈願する祭礼だが、沿道にはハマグリや植木を売る露店が目立つ。伊勢・志摩・伊賀国について述べた江戸時代の『三国地誌』に「昔は毎月六箇日市あり」という。今も七月八日、十二月二十三日名張市といいて、隣国より輻輳して互市す」との記述が見られるように、古くからこの地では山と海の産物を扱う市が開かれていた。名張の植木や柿の木と桑名のハマグリのもつ物々交換などが行われていたそう。



「えびす会」が演じる七福神。衣装は神社式年造営に合わせて新調される

蛭子神社境内で奉納される七福神の舞



町内の食卓にはハマグリが並びますし、大半の家庭が親戚や知人用にと大量のハマグリを購入します」と同社責任総代の山村紀生さん。

くじで福を引き当てた 福娘から授かる吉兆

蛭子神社の八日戎といえば、縁起物の「吉兆」である。名張では「けつきよ」と呼ぶ。ネコヤナギの枝に大判小判、福俵、千両箱、鶴、亀、餅花などの飾りを付けた縁起物で、三〇センチくらいから、二メートル超の大きなサイズまでがそろふ。例年、三千個余りの吉兆が用意されるが、すべて鍛冶町区民によって手作りされるそう。



地域の人たち手作りの縁起物「吉兆」



(左)台風の影響で伐採されたモミジの木(右)吉兆に用いられるネコヤナギは住民たちが枝を刈り取る

遠方からも求めにやってくる縁起物「吉兆」
町民が心を込めて、三千個余りを手作りする

二月八日に初寄会を開き、祭りの準備計画を立てます。現在、鍛冶町は三五軒しかなく、特に二月四日、五日は区民総出での吉兆作りとなります。ネコヤナギを使うのは、神社裏の名張川の岸に多く生えていたうえ、初春に芽吹くので縁起が良いとされたためだったようです」と話す山村さんに続き、鍛冶町区長の中川進さんが内情を付け足す。

祭礼に彩りを添える めでたい七福神の舞

二人八日に初寄会を開き、祭りの準備計画を立てます。現在、鍛冶町は三五軒しかなく、特に二月四日、五日は区民総出での吉兆作りとなります。ネコヤナギを使うのは、神社裏の名張川の岸に多く生えていたうえ、初春に芽吹くので縁起が良いとされたためだったようです」と話す山村さんに続き、鍛冶町区長の中川進さんが内情を付け足す。

人たちが訪れてくださいますので、区民一同、心を込めて作っています」吉兆を授与する役目を担うのが、四人の福娘。選考はくじ引きで、応募してきた女性の中から、「福」の当たりくじを引いた強運の持ち主が任命される。毎年新たに三人が選ばれ、前年の福娘のうちの一人が指導的な立場で加わっている。振り袖姿も艶やかに「ようお参り」の掛け声とともに、参拝者へ吉兆を手渡していく。



(上)1月20日に福娘を選ぶくじ引きが行われ、地元の女性3人が選出された(下)平成26年に神社式年造営された社殿

information

蛭子神社「八日戎」

2月7日[木]宵宮 (13:00頃～)

神事、七福神の舞
福娘による吉兆の授与
名張市観光協会によるハマグリ入り粕汁振る舞い

2月8日[金]本祭 (8:00頃～)

福娘による吉兆の授与
神楽の奉納

